立正佼成会から日蓮宗を見る
――信者の視点から――

梅津礼司
（立正佼成会中央学術研究所所員）

はじめに

私のような者がこうして皆様とご縁をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。この会場は「良縁閣」ということですが、私が良縁になれるかどうかいささか不安ですが、半生を振り返る機会をいただきましたので、私にとっては大変ありがたい良縁だったと感謝申し上げます。

きょう私にお与えいただきましたタイトルが「立正佼成会から日蓮宗を見る」ということでございますが、とても私は立正佼成会を代表してお話しする立場でもございません。したがいまして、立正佼成会の一信者として少しばかりの研究をさせていただいている者としてお話しさせていただきたいと存じます。

私の話が皆様のご布教や今後のご活動のあり方を考えていく上で、ご参考の一助になれば幸いと存じます。

用意いたしましたレジュメのすべてをお話しするには時間がありませんので、私がどうして立正佼成会の信者になって、今日までやってこれたのかという、大変浅薄な信仰体験をお聞きになっていただきたいと思います。

レジュメには宗教社会学的な分析をいろいろと書いてありますが、ここでは省略して、ご質問の時間があれば、そのときにレジュメの記述についてお答えする機会があろうかと思います。

さて、私がなぜ立正佼成会の信者、法華経の信者になれたのかという点をお話しいたします。それは、私が個人的に培ってきた立正佼成会の伝統理解と重なっております。

私が教団のあり方とか教化問題を考えるときには、いつも自分の信仰の原体験が基準になっているように思います。私が生まれ育ったところは、フーテンの寅さんで有名な葛飾の柴又の隣、金町というところで、題経寺は私にとっても遊ばせていただいたり、お参りをさせていただいた懐かしいところでもあります。下町人情のある幸せなところに生まれさせていただいたと思っております。

実は私の幼少年期は、こうして人前でお話しするようなことはできないほど内向的で、いつも机の下に隠れていたような子供だったということを、母から聞いたことがあります。

私がこの信仰を持つ上で大きな影響を与えてくださった方がいます。第一は家族であります。第二には、立正佼成会の青年部のお兄さん、お姉さんです。第三に、立正佼成会の「おばさん」たちであります。おじさんは、どうも私には影響をしていないようです。第四には、立正佼成会の「教務員さん」と呼ばれる教学を説く教団専従の方がいらっしゃいます。この方たちが私に大変大きな影響を及ぼしてくださいました。

家族の中で最初に立正佼成会に入信したのは母で、私が小学生のときでした。父が事業に失敗し、借金返済のために母は大変苦労いたしました。編み物の内職や焼き芋屋、おでん屋をやって家計を切り盛りしてくださいました。過労とリューマチ病で倒れてしまいまして、それからは赤貧に近いような生活もあったわけです。父と母の夫婦げんかも絶えませんで、文字どおり貧・病・争の三拍子そろった家庭でございました。

母にとっては生きるか死ぬかというときに、信仰によって生きる道を選択したわけであります。母からは「何度か

電車の線路の中にうずくまったことがある。しかし、あなたたちの顔を思い浮かべて死ぬに死ねなかった」と聞かせていただいたことがあります。

そんな藁をもつかむ思いの中で、母は立正佼成会の信仰に生きることに賭けたわけです。父や私の反対を押しのけて佼成会通いが始まりました。信仰によって母の生き方が変わりました。それまで父への愚痴と恨み事が多かったのですが、それがなくなり、病気もよくなって、とても積極的な生き方に生まれ変わりました。

私には、それが大変不思議でした。でも、私は信仰というものは弱い人間がするものだと思っていましたから、母の信仰活動には猛反対いたしました。

そんな私が佼成会の活動に参加するようになったきっかけは、青年部の駅前の清掃奉仕でした。参加した理由は二つあります。

一つは、ふだんから頭が上がらなかった親孝行な兄に誘われ、信仰活動ではなくて、駅前の清掃奉仕ならいいだろうということで、断り切れずに参加したわけです。

そのころは、信仰活動に参加している母と兄だけに通用する信仰の話が家庭の中に侵入し始め、そのことで私は疎外感と好奇心が入り交じる複雑な思いでいました。

これは後で気がついたことですが、これまで信仰に反対していた悪人の私は、意地だとか体面を保ちながら、清掃奉仕を利用して、私は善人であるということを示し、母と兄に恩を着せたいという下心があったのだと思います。ですから、表面的には消極的な態度を示しながら、内心はかなり信仰活動に興味を持って参加したと、今は思っております。

この清掃奉仕活動は、毎週日曜日の早朝に駅裏に集合し、みんなでお題目を唱えてから清掃にかかります。駅前の広場、周辺道路と駅舎のトイレを清掃し、集まったゴミを燃やしながら、清掃奉仕の感想や日常生活の問題などを話

し合います。この清掃奉仕を通じて自分の心の垢を取り除き、何事にも感謝ができ、人間らしい人間となるための場であるということを、後日教えられました。

これは私にとって大変大きな衝撃でした。この世の中にこんな生き方をしている青年たちがいるのかという驚きでした。この清掃奉仕に参加して、母の生き方の変化が少しだけわかったような気がいたしました。信仰や信仰者に対する私の見方が根本から変化したように思います。

それからは、青年部の法座という会合に参加するようになりました。この法座では、零細企業に働く青年たちの赤裸々な苦悩の告白に触れ、中学生だった私はびっくりしてしまいました。信仰というのは、身辺に起こる現象を仏様の計らいと受けとめ、自分たちの心の持ち方や行いのあり方を見つめ直すためにあるものだということを知りました。

法座に興味を持った私は、「おばさん」たちの法座にも積極的に参加させていただきました。ここでも、またまたびっくりしてしまいました。子供を育てる母親の苦労や、嫁と姑のいさかい、不甲斐ない亭主の愚痴話、洗濯の仕方から掃除の仕方まで、宗教的なよろず相談所でありました。

高校生になって教会や本部で教学を定期的に学ぶ機会が与えられました。佼成会の宗教的活動の源泉が法華経の教理や日蓮聖人の教説にあることを情熱を込めて説く人々に出会ったわけです。こんなにもすばらしい教えなんだ、これを広めずにはいられないという心境でした。

それからというもの、高校部をつくるために毎日のように布教に出かけました。あんまり熱中し過ぎましたので、とうとう母から勘当を宣告されるほどでした。困って、青年部長さんにご指導を仰ぎにまいりました。できれば一晩ぐらい泊めていただこうという虫のよい腹づもりでしたが、青年部長さんは、こんなにも純真で熱心な私の気持ちを察するどころか、「お母さんのおっしゃるとおりだよ。学生の本分は勉強をすることにあるんだから、その勉強をほったらかしにしての信仰では本末転倒だね。本当に信仰活動をしたいのなら、その分、寝る時間を削って活動する

以外にはないんだよ」と諭されました。「本当に母や部長さんの言うとおりだ。懺悔して、厳しいけれども頑張ってみよう」と決意いたしました。

でも、勘当されたわけですから、帰る家がありません。恐る恐る

「部長さん、きょうはどうしたらいいでしょうか」

と尋ねると

「念じて家へ帰るんだ」

真夜中の道を懺悔しながら「仕方がない。きょうは縁側にでも寝て、あす両親におわびをして許していただこう」と思いました。

家に着いて、あきらめながらもそっと玄関の戸を引くと、スルスルと戸があくではありませんか。気づかれないように仏前に座り、仏様に懺悔と今後の決意を申し上げ、きょうから実践しようと思い、机に向かい勉強をしようと明かりをつけますと、机の上にはこれまでに出たこともない夜食が用意されていました。深い親心に改めて感激し、涙ながらに合掌してそれをいただいたことを覚えております。

法華経の布教以外に人々の幸せ、世界の平和はないと確信し、親の反対を押し切って法華経を学べる唯一の大学ということで、立正大学を選択いたしました。立正大学に行けばすばらしい先生や学生がいて、法華経を広めるために日夜切磋琢磨が行われていると思い込んでいました。希望と使命感を持って入学し、クラブ活動も現代仏教研究会に入りました。しかし、入学して四カ月で早くも挫折感を味わいました。大学の講義はあまりにも生活や社会とかけ離れ、宗教的な使命を実現しようとする先生も学生もあまりいませんでした。学生紛争も起こり現代仏教研究会も夏の合宿で退部し、私は佼成会の学生部活動とアルバイトに精を出すようになりました。

大学一年生のとき三泊四日にわたる大学生の全国錬成会に参加させていただきました。ここでは教学研修のほかに

法座や唱題行が行われ、自己の生活と信仰のあり方をさらに反省する機会となりました。

私はこの錬成会に参加するまで、結構、自分は親孝行だと思っていました。外づらがいいほうでしたから、近所では小さいころから病気のお母さんの手助けとなり、よくお手伝いをし、しかも礼儀正しい子として評判でした。この錬成会の法座で、これまで欝積していた自分のつらい思いを吐き出しました。母の病気と貧乏で、あまり甘えることもできず、遊びたいときにも遊べず、貧しい暮らしに耐えながら家の手伝いをし、何て自分は不幸なのかと、生まれてきたことを呪ったことや、親を恨んだこと、少年期に味わったみじめなつらい思いなどを話しました。皆さんは涙を流しながら聞いてくださいました。胸のつかえがなくなり、すっきりした心でした。

黙って私の話を聞いていた教務員さんは、おもむろにこう言いました。

「ずいぶんつらい思いをしたんだね。でも、あれもしてあげたい、これもしてあげたいと思いつつも何もやってあげられないお母さんの気持ちを君は考えたことある?」

私はこのとき頭をなぐられたような衝撃を覚えました。自己中心な私は、親の気持ちを考えたことなんかなかったからです。

夕食を終えて唱題行が始まります。教務員さんが参加者に唱題行に入る心構えを話してくださいました。

「これまでの自分の生き方を一つ一つ振り返ってみよう。両親や兄弟、そして私たちの命を支えてくれている多くの人々や大自然に感謝できる私たちだっただろうか。唱題行を通じて反省すべき点を反省し、これからの生き方をどのようにすればよいのか真剣に考えてみよう」と。

目を閉じて、腹の底からお題目を唱え始めました。とめどもなく涙が流れ、走馬灯のごとくにこれまでの人生が思い浮かんできます。「お母さん、なぜ僕なんか生んだの。お母さんが僕を生んだから、僕がこんなに苦労するんじゃないか」と、病床に伏せている母に向かって泣いたこともありました。このときの母の悲しい顔と涙が思い起こされ

ました。愛する我が子からこんな言葉を聞くなんて、想像だにしなかったことでしょう。どんなにつらかったろうかと思うと、次々と父母に苦労をかけてきた過去の自分の姿が脳裏に浮かんでまいりました。なんて私は驕慢だったんだろうか。私ほど親不孝な人間はいないと気づかせていただいたわけです。「お母さん、ごめんなさい」と、私はその場で泣き伏してしまいました。鼻水と涙でクシャクシャになってしまいました。「もう決して親を悲しませるようなことはすまい」。そう決心しているときに唱題行が終わりました。

気がついてみると、周りには私と同じように目を真っ赤にはらして泣きじゃくっている人たちがたくさんいらっしゃいました。唱題行で感じたことを法座でみんなが話し合い始めました。今までだれにも話したことのなかった苦悩や、つらい思いが吐き出され、まだ会って間もない者同士が涙を流し合い抱き合って、これからの生き方を変えていく決心を確認し合っていました。「信仰の仲間とはこんなにすばらしいものか」と、またまた感激いたしました。

錬成会から家に戻った私は、両親に手をついて、今までの親不孝を涙ながらにおわびいたしました。こんな私の姿に初めはびっくりしながらも、母は私の手を握り、「おまえにも苦労をかけてすまなかったね」と、涙ながらに背中をさすってくれました。信頼していた友人に裏切られて、妻子から甲斐性のない夫・父と見られながらも、私を育てるために頑張ってくださった父の姿にも気がつくことができました。すべてが私を仏縁に導いてくださるご本仏様のお慈悲であり、前世の誓願を果たすためにこの世に生をうけたのだ。だれもが生かされて生きているんだ、本当は大調和の世界なんだと確信した私は、ますます法華経の弘通に意欲を燃やしました。

大学二年のときに武井坊の小松上人が仏教学部自治会の委員長になりまして、私を自治会活動にお誘いくださいました。私はこの自治会活動を通じてすばらしい先輩、友人に恵まれました。ここにいらっしゃる三原上人、赤堀上人もそのころ出会った方々です。勉強や布教に意欲を持ち、人格的にも立派な方たちでした。このような方たちとの出会いの中で、私は日蓮宗に得度し一僧侶としてお題目弘通に生涯を賭けようと決意したこともありました。

しかし、私のような未熟者ではお役に立つことはできないと思い、自分の信仰を見詰め直すために、佼成会の学林に入林した後、青年布教に五年間、儀式課で二年間、そして現在の中央学術研究所にご厄介になって十二年目になります。今、研究所では宗教協力運動や生命倫理問題、布教者の信仰体験などについて研究をさせていただいております。

以上が、私の信仰生活のあらましであります。

二

ここで皆さんにご留意いただきたいことは、私が宗教的理念や観念にのみ共感して法華経の信仰を始めたのではなく、佼成会の人々の生きる後ろ姿、懸命さに深く胸を打たれ、その経験の連続が今日までの私の信仰を支えてくださったということであります。

こうした私の信仰生活の中で、私の内面に大きな影響を与えてくださったもう一つのことがあります。それは佼成会の「おばさん」たちの信仰であり、生き方です。ここで言う「おばさん」は、都市社会の下町に住む中高年層の婦人一般を指しており、いわゆる社会的な存在としての近所の「おばさん」であります。一般的に言って新宗教運動の中心的な担い手は、こうした街や村の「おばさん」たちではなかったでしょうか。

この「おばさん」たちの中に○○教の「おばさん」がいて、地域社会に少なからぬ影響を与えていました。私は教祖研究も大切だと思いますが、その教えを信じて布教に歩く、ちょっと変わった普通の人たちの研究も同様に大切だという考え方を持っています。信者の獲得や育成には、大衆の中にあってふだんは目立たないけれども、ちょっと変わったところのある○○教の「おばさん」たちの大活躍があります。私はこの「おばさん」たちの信心や布教活動を知らないと、近代日本の宗教運動の重要な側面を見落としてしまうのではないかと考えています。

そこで、全国の佼成会の「おばさん」たちの宗教的な生活史の聞き取り調査のために五年ほど歩かせていただいて、去年、やっと資料がまとまったところです。それについては別の機会にお話しさせていただきたいと思っております。

さて、また個人的な信仰物語に戻りますが、私が小学生のときでした。教団本部で「お当番」という奉仕活動に参加しました。下足番でした。当時は皆さんはまだ下駄をはいてこられました。その下駄を合掌してお預かりし、雑巾で丁寧にお掃除をすることが役割です。幹部らしき「おばさん」は「よく来たね。お役をいただいてよかったね」という決まり文句で、私たちに声をかけてくれました。これらの「おばさん」は時々見回りに来て、「一生懸命やっているかい。本当にありがたいことなんだよ。一生懸命やるんだよ」と、また決まり文句を言って通り過ぎます。

この「おばさん」たちは、下駄の表ばかりを拭くのではなく、下駄には裏もあって歯もある、その裏こそ磨くべきだということを教えてくださいました。私はこれらの「おばさん」から、お掃除がなぜ宗教的実践であり、ありがたいことなのかを教えていただきました。トイレの掃除のときは、便器の中に手を突っ込んで汚物を拭き取ること、一度掃除をすればよいのではなくて、その日一日中何度でもお掃除をします。

ある日、こんなことがありました。同じ場所で七、八人の人と一緒に雑巾がけをしていました。仮に佐藤さんとしましょう。佐藤さんは、今、田中さんが掃除したばかりのところを掃除し始めました。田中さんは入信してまだ間もない方だと思います。田中さんは

「あのォ、そこはもう私がお掃除させていただきましたけど」

と言いました。佐藤さんは「そうですか」と言いながら雑巾がけをやめようとしません。田中さんは少し不愉快なわけです。すると、近くにいた鈴木さんが

「田中さん、ここではね、お掃除は自分の心を磨く手段なの。だから、だれでも何回でもお掃除していいのよ」

と言いました。私はその言葉を聞いて、今まで何気なく掃除をしていた自分が恥ずかしくなりました。私は佼成会

の道場の清掃奉仕をして、同じことを真心を込めて繰り返すことの大切さや、手の届かないところ、目に見えにくいところにこそ心を配ることの大切さを教えていただきました。

佼成会の「おばさん」たちは、ほかにも物の見方、考え方をいろいろと教えてくれました。例えば、四角い部屋を丸く掃いたり、台所に洗い物がいっぱいたまっているような家には、苦労が絶えないとか、その家の米櫃にどのぐらいのお米が残っているのか、その加減がわからないようでは人さまのお救いはできないとか、物も言うべし、酒も買うべしだよとか、いろいろ教えていただきました。

そのおかげさまで、私は台所に立つことも、トイレ掃除もあまり苦にならなくなりました。現在、私の家では、毎朝、家族全員が家事を分担してから出かけます。長男長女はトイレ掃除、次男次女は玄関のお掃除や配膳の支度をしますが、これは私の家族にとっては仏道修行の一環として実践させていただいております。

佼成会の「おばさん」は「褒められたり、お礼を言われるようになったら気をつけなさい。人間は驕慢になりやすいからね」とか、「信仰はね、妙の世界を体験しなければわかんないのよ。理屈や才覚では救われないのよ。頭のいい人ほど救われないわね」とか、「信じて、念じて、行じるんだよ。信仰はこれしかないね」と言います。また、「本当の信仰のありがたさは、導き親にならないとわからないのよ。数をふやしたいから勧めるんじゃないのよ。親になって初めて親心、仏心がわかるのよ。導きをさせていただきましょうね」などと言います。

私はこういう言葉に大変弱い人間でして、いつもこの「おばさん」たちには頭が上がりません。「おばさん」たちの理屈ではない世界で信仰というものを学ばせていただいたような気がいたします。私はこういった信仰が好きなんです。こういう「おばさん」たちがいたから、私は佼成会の信者になったんだと思います。恐らく皆さんのお寺にも、そういう「おばさん」の信者さんたちがたくさんいらっしゃるかもしれませんし、皆さんの奥様はきっとそういう方たちで、信者さんたちの心の支えになっていらっしゃるのではないかと思います。

「おばさん」というのを少し概念化しますと、佼成会の「おばさん」たちは、信仰を理屈とか知性で考えないで、本能とか野性とかでとらえていらっしゃいます。「おばさん」は母性とか女性といった概念だけではとらえることのできない存在だと思っております。

「おばさん」は出来事や事柄を難しく考えることを嫌います。例えば、おなかがすいていると言うと、どうしておなかがすいているのか、ご飯を食べなかったのかという質問はまずしません。「何もないけど、ご飯食べていきなよ」と言います。道で子供が転んで怪我をして泣いていますと、「オヤオヤ」と言いながら助け起こし、傷口に赤チンをつけて割烹着で涙を拭いて、あめ玉の一つもくれて、「気をつけるんだよ」と言って立ち去ります。このとき、この子がどこのだれかなんていうことは尋ねません。井戸端会議が好きで、世話好きで、社会的な存在であります。

大体、この「おばさん」ちのお父ちゃんや子供たちは、お母ちゃんに頭が上がりません。「おばさん」が威張っているというのではありません。漬物や芋の煮っころがしのうまさは、結構、近所では評判がよくて、余分につくっては近所にお裾分けをすることを忘れません。お父ちゃんや子供たちは、「かあちゃん、少しはおれんちの分も取っとけよ」と言います。「わかってるよ」と言いながら、よさそうなところを人にあげてしまいます。父ちゃんは「全くおめぇってやつはよ、いつもこれだ。どうにかなんねぇもんかね」と言います。これが私の言う「おばさん」の典型であり、宗教性であります。これは私のようなおじさんでもできることですが、「おばさん」にはなかなかかなわないというのが実感です。

でも、こういう「おばさん」が、最近は少なくなってきたような気がいたします。つまり、最近の「おばさん」は化粧や服装が少し派手になったように思います。言葉使いも丁寧になり、視野も広くなり、それなりの教養も感じさせるようになりました。しかし、難民の救援募金をしながら、食べる物を粗末にしていたり、家庭教育の勉強をしながら、家事の手抜きをしているようなところがあります。陰の徳を積むという発想はなくなって、人によく見てもら

えるような慈善を行うようになってきたように思います。

現在の「おばさん」は、よく言えば外では品がよくて、格好がよくて、物知りでそつがなく、忙しい。しかし、私にはいま一つ共感できない部分を感じています。表面的と思うからでしょうか。これについてはもう少し後で考えたいことですが、一言で言うと、生活から遠ざかる宗教共同体、生活から遠ざかる教団というイメージがあります。

しかし、これらの「おばさん」たちだけで信者が獲得できたかというと、そういうわけでもないと思います。私という個人を救済する至れり尽くせりのシステムが教会や教団に用意されておりました。儀式行事、手取り、導き、当番という基本的な日常生活における信行を確立するシステムのほかに、個人の布教活動や求道精進を支援するための諸制度があります。年齢や性別に対応したきめ細かな活動組織があります。これらの組織には、信者のニーズに応じた各種の教育制度が設けられております。教育や啓発のための教材、本部レベルで開発された布教支援を行う環境整備がなされてきております。また、組織の役務別教育が頻繁に行われ、時代、環境の変化に対応できるよう、本部、教会では絶えず機構の改革など、試行錯誤を繰り返しております。あまりやり過ぎるので、多少混乱することもあるわけです。

例えば、現在では、本部教庁には約十部門三十課があります。これに私の所属する中央学術研究所や佼成カウンセリング研究所、東京家庭教育研究所、教育者教育研究所、佼成平和研究所、庭野平和財団、佼成文化協会、学林、佼成図書館、佼成出版社、佼成病院等が設置されております。また、明るい社会づくり運動の提唱や宗教協力運動の推進、平和基金を設置して国際的な開発援助活動など、多方面の活動を行っています。これらの機構や活動は用意周到に計画されたものではなくて、その時代、その時代に何とか社会や人々の幸福に寄与したいという思いの中で、開祖を先頭に各部門でそれぞれに悪戦苦闘しながら、結果として今日のような姿になったと思っております。

今まで少し私的な話をさせていただきましたが、この話を少しばかり教化学に即して述べてみたいと思います。

第一に、魅力のある同信、仲間、先輩、幹部がいたということであります。ここで言う魅力とは、信心を含む人柄であり、信者にとって身近な人格モデルになるような人材の存在が不可欠だということです。それもいろいろな人たちの志向性に対応できるよう、多様な人格指標が受容できる僧伽の形成が求められているのだと思います。

第二に、現代的な知性や情緒の欲求に応えられる教材や教理があるということではないでしょうか。これはソフトの面とハードの面と両方の側面が必要です。例えば、わかりやすい教理体系、テキスト、機関誌紙、ＶＴＲなどの視聴覚教材や衛星放送による行事中継とか、マスメディアを通した布教活動などが含まれると思います。

第三には、教団という宗教の共同体には、人々の心を統合する求心的な象徴や宗教指導者が求められているということが挙げられると思います。例えば、本尊、祖師、教祖、法主、教えの体験者、解釈者、それから、シャーマンなども含まれると思います。

第四には、多様なニーズに応えられるシステムが統合されているということではないでしょうか。例えば、教育、組織、制度、施設、儀式など、それぞれの体系があって、しかもそれが有機的に相乗効果を発揮できるような統合のシステムとして働いていることが重要だと思います。

これらは教団レベルで考えないと実現は難しいかもしれません。

三

今まで、私という一人の人間が一信者になるために教団がどういうふうに私を支えてくださったかということを、大筋話をさせていただいたわけです。

今度は、私個人が教化というものをどのように考えているかという点についてお話をさせていただきます。

まず私たちは「教化」という言葉を聞いてどのようなイメージを持つかということですが、ある人は真っ先にお寺

の所得の倍増というようなことをイメージされる方もあるでしょうし、檀信徒の信心をいかに教化するかということをイメージする方もいるでしょうし、折伏によって新しい信者を獲得しようということをイメージする方もいるでしょう。

ここで問題となるのは、教化という言葉からイメージする対象と目的は、個人個人異なるということだと思います。それぞれのお寺の環境や条件、信者さんたちの規模、いろいろな条件によって、教化という言葉から受けるイメージは変わってまいります。私はだれに何をしようとしているのかという問題があろうかと思います。

極端な言い方をいたしますと、仮に宗教団体を情報産業の一種とみなして、教化活動を営業活動としますと、営業活動をするためには、まず売りたい商品（情報）が不可欠なわけです。それから、営業方針とか目標とか、営業を支援するためのさまざまな戦略があります。また、営業拠点や営業マンが必要だと思います。企業は情報を買ってもらうためにあらゆる必要な資源を動員して、市場で同業者と競争するわけです。

このような企業行動から類推することは大変危険なことですけれども、問題をわかりやすくするための方便としてお許しいただきたいと思います。

そうしますと、私たちの職業は第三次産業のサービス業に入ることになります。一般の企業と異なる点は、恐らく営利目的ではないという点と、情報の質がデータによるものではなくて、超越的な信念の価値に基づいていることではないでしょうか。

そういった点を確認して、少し考えてみたいことは、まず私たちが人々に買っていただきたい情報とは一体何なのか。買っていただくというのは言葉が悪いですが、私たちが人々に受け取っていただきたいメッセージは何なのか。現在の人たちに向かって私たちが発信する情報は役に立つのかどうかということが、まず問われていると思います。

皆さんにメッセージを発信するためには、まず営業目標というものがあります。それは人によってはさまざまかと

思いますが、新しい信徒を年間百人獲得したいとか、熱心な信徒を何人つくりたいという目標もあるかもしれません。それを達成するための戦略をどういうふうに考えていくのか。その拠点をどこに定めるのか。実際にメッセージを投げかけ、パフォーマンスをする人はだれなのか――それは当然私たち一人ひとりになると思いますが、それと同時に宗教市場の動向はどうか。例えばここの地域ではどういう宗教の分布があって、宗教浮動人口がどのぐらいで、市場占有率はどの程度あるか、そういう情報を得ることによって、戦略も変わってくるわけです。また、実際に布教活動するための財源をどう確保するか。こういうことが、恐らくマネージメントの勉強をなさっている人は、パッと頭の中を駆けめぐるのだと思います。

こういった発想に基づくやり方をメーカー側の論理、情報を発信していく側、売り手側の論理と言います。これに対応する人たち、つまり、宗教を求めている潜在的な人々、ないしは別の宗教を持っていて、何かもっといい宗教はないかとか考えている人々を「消費者」と言うと語弊がありますが、ユーザー側の論理ということになります。情報や商品を選ぶ側の論理になります。

市場には宗教ブームと言われるほどの宗教情報が氾濫しています。そういう情報の中で私たちの情報が大衆に選択してもらえるかどうかという問題です。新宿の紀伊国屋という本屋さんに行きますと、宗教関係の本が山積みにされておりまして、限られた宗教人口の争奪戦が、こういうところでも行われているわけです。バレンタインデーのチョコレートのように、自分の好みに応じた宗教が選ばれる時代になってきているわけです。

私が見たところでは、こうした情報は浅薄で断片的で、興味本位で書かれたものが少なくないと思います。何冊かの本を読んで、宗教活動にちょっと参加してみて、その宗教がわかったつもりになる人たちが今は大変多くなってきていると思います。フルコースではなくて、ア・ラ・カルトでしか宗教を理解できなくなってきている。これは、私たちの努力が足らない点でもあろうかとも思います。簡単に企業化されてしまう、簡単にメーカーの論理で展開され

て消費されてしまうような宗教は、本当の宗教と言えるでしょうか。そういったレベルで宗教を理解する人たちがどんどんふえることは、私たちの信じているお題目や法華経の精神にかなっているのでしょうか。昨今の宗教ブームと言われるようなものは、恐らく日蓮聖人から折伏の対象になるような宗教ではないだろうかと、私は思っております。

こういった宗教を、私は仮に「商品化された宗教」、「消費される宗教」と呼んでいます。こうした状況から、これからの時代を創造し、人々の精神を救っていくような新しい宗教が創造されるかというと、私にはどうもそうは思えないわけです。

本来宗教というのは個人に機能することはあっても、個人に従属するものではないと思います。宗教は個人のアクセサリーでも金儲けの手段でもなく、ましてや人々を支配するためのものではないと考えております。人生の真実にともに目覚め、生き、衆生とともに菩薩道を行ぜんがために法華経があり、本尊を拝し、道場があるのだと思います。

したがって、私の考える教化学とは、僧侶が信徒に対して信心を得心させるための経験や知識、技法を学ぶことは二の次になります。本来は、ご本仏様のお導きをともに体験し、語り合うこと、悟り合うこと。つまり、ご本仏様の教化を体験し、悟ることが第一義であろうと思っているわけです。

そうすると、私たちの身辺に起こるさまざまな出来事や出会う人々は、私を教化せんがためのご本仏様のお計らいということになります。法華経に「ただ我一人のみよく救護をなす」とありますから、私たちが教い主になるわけにはまいりません。私たちができることは、ご一緒に行学すること、もしくは少し学習力が身についていれば、ちょっと上のお兄さんかお姉さんとして、弟や妹のお世話役という役回りを職業的にさせていただくということではないかと思っております。それも弟や妹より半歩先んじているというだけで、人々が成長して自灯明、法灯明の歩みができるように援助することが私たちの役回りではないか。それ以上することはおせっかいになるのではないかと思います。

佼成会の用語に「自分が変われば相手も変わる」という言葉があります。環境・条件の変化を待つのではなくて、

いつも自分が問題解決の主体であると自覚しなさいという教えだと理解をさせていただいております。法華経に「道を行じ道を行ぜざるを知って、度すべきところに従って法を説く」と説かれていますように、教化はご本仏様がしてくださっている、それを私に感得できるかできないかの違いで、法華経に「近しといえどもしかも見ざらしむ」とご教示くださっています。実は見えないのは「あなた」ではなくて「私」であったんだということを、最近、気づかせていただきました。

私は、ちょっと前まで人に講演や講義をする、つまり、教えてあげることが大好きでした。しかし、最近は一緒に学べるグループ・ワーキングのような体験学習方式をとる場合が多くなりました。このほうが交流があって楽しいということがありますし、一方通行にならないで自分も学ぶことが多いからです。私の体験では、教えることに一生懸命努力してもなかなか効果が上がらないというのが実感です。教えるという行為には大変無駄が多く、労多くして効がないということに少し気がついてきました。いろいろ教えて、その人から役に立ったと感謝されるときは、その人のほうが私の能力より上で、その人の受けとめ方がよかったということが多かったような気がいたします。

教化で大切なことは、気づき合うことではないかと思います。気づき合えるときというのは、是非とか事の善悪という価値から自分自身が離れて、相手の思いに私が共感できているときのように思います。

今まで経営相談から人生相談まで各種の相談や分析、診断、助言、企画に携わってまいりましたが、教えるという姿勢でやっていますと行き詰まってしまいます。どうして行き詰まってしまったのかということを突き詰めてみると、実は私自身の問題だったということに行き当たったわけです。仕事の性格上、相談相手は教えてくださいという姿勢で私に対面してきます。すると、私は「教える人」としてふさわしい振る舞いをしなければいけないのではないかと、今まで勝手に思い込んでいたわけです。教師という役割は、教えることにとらわれてしまって、教えるために学ぶという転倒に陥ることが間々あると思います。そうでなければ、教師という権威に依存をしてしまいがちであるという

ことが、私の実感です。

いろいろな本を読み、知識や理論に基づいてアドバイスをしても、あまり役に立ちません。自分がいつの間にか便利屋さんになってしまっているということに気づきました。教えることに一生懸命になると、自分自身が消費されてしまい、教えることに腐心すれば腐心するほど、私の心の中に虚無感が生じ、充実感がなくなり、疲労してしまいます。私は何をしているんだろうか。私は何のためにこの世に生まれてきたんだろうかという思いがたびたび去来して、こんなことで私は本当に法華経を学んでいる人間なのだろうかという疑問を持ちました。

落ち込みますと、法華経の読誦に励みます。私どもの法華三部経は訓読でできていますので、比較的読みやすいわけです。一生懸命読誦していると、お経文が私の胸の中にグッと入ってくるわけです。三十五歳くらいのときから、お経の中にある「自ら仏に帰依し奉る」「自ら法に帰依し奉る」という「自ら」という言葉がキーワードになってまいりました。

実は私は、いつも人の物真似や人からの借り物で教えていて、自ら体得し、自ら気づき、自ら目覚めて、自分の言葉で語っていない自分に気がついたわけです。このままでは偽者の仏教者にしかなれない、一生仮面をかぶったまま生き抜いていくことにはとても耐えられないと思うようになりました。せっかくお手配いただいた人生を私が生きたいように生きてみようということを少し考えるようになりました。私が本当にしたいことは何かということを考え始めました。これまで一生懸命身につけてきた仮面やプロテクターが重くなってきて、それを少しずつはがしていく努力をし始めました。それは、素顔の自分、足りないものだらけの自分と出会うことでありますし、大変恐ろしいことであります。怖かったのですが、自分自身が醜くても、その醜い私をありのままに認めていこうという気持ちになってくると、少しずつ気が楽になってきました。

少しずつ仮面やプロテクターをはずし始めたときに、一番最初に理解者になってくれたのは家族でした。「仮面を

かぶって、鎧・兜をつけて一生懸命突っ張ているあなたより、素顔のあなたのほうがすてきよ」と言われました。今までかぶってきた仮面やプロテクターを一遍に外すことはとてもできません。ですから、きょうも固くなっていましたし、原稿を用意したのもそういうプロテクターの一つかもしれません。ありのままの自分がさらけ出せないところがあるわけです。そんな中でも少しずつ自分の素顔に自らが出会っていくことの大切さを感じております。そういう心の作業をしてきた分だけ、その人のありのままの姿そのものが尊いんだということが、少し見えてきたような気がします。

問題解決の以前に、人々と基本的な信頼が築けないことには、原理原則や自分の信念、体験を幾ら力説しても、どうにもならないことが多いと思います。結局、私の目の前にいる人が自ら菩提心を起こさない限り、本当の問題解決の道は開けてこないということに気づき始めました。目前の人に菩提心が起こると、その人の環境条件が自然と変化してくることが少しずつわかってまいります。どんなすばらしい理論でも、私やその人の人間的成長につながっていかないような理論や方便は、本当に方便と言えるんだろうかということも、今、感じています。

私はこれからの教化学ということを考えるときに、教師がまずお互いに本当の自分に出会えるような学び方をしていく必要があるのではないか。信者さんや大衆をどう教化するかという前に、教師が相互に発見し合えるような教化の勉強の仕方がどうしても必要になってくるのではないかということを考えます。それが先ほど申し上げました体験学習ということであります。

本当の自分に出会う、私は何をしようとしているのか、私は何を願いとしているのか、私はどんな人間なのかということに、私自身が出会っていく、宗教的な言葉で言えば、仏様が私をどのように教化してくださっているのかということに気づくことだと思います。仏様のお導きに出会っていくための教師の勉強会が大変大切なのではないかと思います。そのことを考え合わせてみまして、集まった教師同士が、その場で気づき合い、悟り合う世界、お互いが拝

み合っていけるような体験学習のプログラムを、自分なりに少しばかり勉強をさせていただいております。

法華経に方便品がありますが、殊のほか方便が大切であると説かれております。仏様の慈悲とか智慧は衆生を教導する方便力に結実しているように思います。法華系新宗教が勢力を伸ばしたのも、結局はこの方便力の巧みさにあったのではないかと思います。

最近、私は方便という言葉を、「今、この人の役に立つ真実」というふうに解釈しております。「今、この人の役に立つ」だけではダメだと思います。求道精進につながらなければ方便とは言えないのではないかと考えております。

いろいろな病気が治ったり、問題が解決するときというのは、その人に役に立つ真実を、その人と私が気づいたときではないでしょうか。言いかえますと、私を教化せんがために、仏様のお使いとして私の前に立ちあらわれてくれた方たちと見えるかどうかということが、私にとっての一番大事な問題であると理解をさせていただいております。

私の反省ですが、いつの間にか教化というものを、人を自分の価値に同調させる、自分の思考に同化させるという方向で考えて失敗してきたわけです。教化というのは人を拘束するためではなくて、自由自在の心境をともに獲得するために相互啓発にならなければ、それは教化とは言えないのではないか。私も自由自在になっていく、人も私と出会って自由自在の心境を獲得していく方向に展開していくことが方便であり、教化ということではないか、そんなことを考えております。

四

私たちは宗教者として、個人個人の内面の奥深くにかかわる職業ですから、人々の信心や社会の動向には大きな関心を寄せて、人々と社会の福祉に貢献できる宗教者になることが、社会から期待されていると思います。近年、私自身がどのように成長すれば法華経の信者として働くことができるのかということを考えているわけですけれども、今

の私の一つの目標は、礼拝のできる人間になりたい。そして、観音様のような生き方が少しでも身についてくればいいなということです。これは私だけではなくて、ひょっとしたら宗教団体や宗教に携わる方たちが、今、社会から一番求められていることではないか。そういう観音様のような三十三身に現じて社会のさまざまな階層の人々と協力し合って、人々の救済に働かせていただくことではないでしょうか。そうならないと、宗教はこれから無用の長物として人々から忘れ去られてしまうことになりはしないかという危機感を持っています。特に法華経の伝統を継承する方々と「地涌の菩薩」としてお互いに宿世の誓願をかみしめ、今生の御役を務めさせていただけることができたらありがたいなと願っております。

国際社会の中では、仏教徒は少数派でありますし、思想としての仏教はチベット仏教や禅仏教、真宗仏教は知られていますが、法華仏教はほとんど知られていませんし、国内においても法華経の思想が正しく浸透していないのが現状だと思います。

私たちは、このすばらしい法華経の教えを人さまにお伝えをしていくために、どのような努力をしていけばいいのか。そんなことを、皆さんとご一緒に智慧を出し合える機会があればありがたいと念願しております。私個人としては、私が所属する立正佼成会がこの世の中にあることが、日本の人たちにとって誇りに思われるような教団づくりをしていきたい、そんなことを願っております。

以上で私の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

※本稿は、平成四年二月二十五日、福山市良縁閣にて行われた第十八回教化学研究集会にて講演されたものを筆録したものです。